

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 51

December, 2017

関西大学ニュースレター
発行日：2017年(平成29年)12月6日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

■法政大学、明治大学との連携協力協定を締結

大学の枠にとらわれず、 変化を生み出す連携と交流を

田中 優子 法政大学総長 / 土屋 恵一郎 明治大学長 / 芝井 敬司 関西大学学長



■学長コメント —5
法政大学・明治大学・関西大学
3大学による連携協力協定締結までの
経緯と今後について

■リーダーズ・ナウ —7
在学生— 経済学部 4年次生 花房 真優 さん
卒業生— 株式会社阪急阪神百貨店 第1店舗グループ
阪急メンズ大阪メンスインターナショナルファッション
販売部長兼パーソナルサービス部長
西ヶ峰 充宏 さん

■研究最前線
外国語の学習方略に関する研究
小学校英語指導のための
校内教員研修システムを構築 —9
外国語学部 — 池田 真生子 教授
次世代電池の研究
全固体電池のためのイオニクス材料探索 —11
化学生命工学部 — 荒地 良典 教授

■トピックス [学内情報] —13
文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に2年連続で選定
東アジア文化研究の一大拠点「KU-ORCAS」を設立
社会学部創設50周年記念式典
50年の歴史を振り返り、さらなる躍進へ ほか
■社会貢献・連携事業 —17
日本の大学初！パチカン図書館と協定を締結
パチカン図書館所蔵のアジア関連資料の研究を始動 ほか
■関大ニュース —19
フィギュアスケート・グランプリシリーズ
宮原知子さんが金メダル、本田真凜さんも躍動 ほか

■鼎談

変化を生み出す連携と交流を

●法政大学、明治大学との連携協力協定を締結



法政大学・明治大学・関西大学は、より活発な相互交流を推進するために、幅広い連携を強化することで合意し、9月25日、連携協力協定を締結した。

3大学はいずれも、「日本近代法の父」と呼ばれるボアソナードに薫陶を受けた若き法曹家たちが中心となり、1880年代に法律学校として設立された。以来、大規模総合大学へと発展した今日に至るまで多くの共通点を持っており、今後は大学間連携活動を通じて、教育・研究をはじめ、さまざまな活動において一層の進展を目指していく。

関西大学東京センターでの調印式には、芝井敬司学長、法政大学の田中優子総長、明治大学の土屋恵一郎学長が出席。調印式終了後には田中総長を司会役に鼎談が行われた。

協定の合意に向けて、何度も話し合ってきた3人は既に気心の知れた関係。和やかな空気の中、自由なアイデアが飛び交った。3大学の連携・協力の進展がこれからの大学の在り方にインパクトを与えると予感させる充実した意見交換の場となった。

田中 優子
●法政大学総長

土屋 恵一郎
●明治大学長

芝井 敬司
●関西大学学長

◆学長・総長という職責についての実感と決意

田中 最初に自己紹介を兼ねてご専門のこと、学長・総長の仕事について思うところを一言お願いします。

土屋 専門は法哲学で、イギリス19世紀の思想が中心です。ただ、いわゆる正統派の研究ではない、どちらかという逸脱した研究であったと思います。また、ご承知の通り私は能の本も書いており、30年以上能のプロデューサーを務めてきました。

プロデューサーは、役者を集め、舞台を設定し、資金やお客を集めることが仕事です。学長の仕事も同様です。教員を集め、お金を集め、学生を集め、教員が活躍できる舞台を準備し、そこで学んだ学生を新しい世界に送り出す。まさに学長はプロデューサーであるという意識で、私は学長職をやってきました。つまり、学生や教員がどれだけ自由に大学という枠から逸脱できる場所にするかが、プロデューサーたる学長に求められる仕事だと思っていますので、自由にバイタリティを持って行動できる学長でありたいと考えています。

芝井 私は西洋近現代史の教員ですが、本来は歴史学の方法論や史学史と呼ばれる分野を研究してきました。近年はイギリスの歴史家エドワード・ギボンの家系に関わることを専らの仕事にしています。その関係でイギリス東インド会社の文書も読みますし、イングランド銀行創設期の帳簿も調査し、原史料に触れてきました。

学長の仕事について申し上げますと、まず、学長として、その権限を何のために使うのかを強く意識しておきたいと思っています。学長には任期があります。やるべきことの決断はもちろん、やるべきではないという決断も迫られるかもしれません。その権限を持っていることの重さをいつも考えていたいと思っています。

また、会議をこなすことや祝辞・挨拶をすることだけで終わるのは嫌だという思いがあります。そのためには現場を大事にしたい、広く学生や教職員の話を聞きたいと思っています。私はこの1年間、オープンキャンパスに出て、受験生と話す機会を持ちました。関西大学を受験したいと思っている高校生と触れ合うこともすごく大事だと思っています。

田中 私は法政大学文学部の日本文学科出身です。なぜ日本文科に入ったのかと言うと、その分野のすごい先生がたくさんおられたからです。それも、学問領域で権威のある先生ではなく、むしろ権威に反発を覚えながら、評論の世界に入っていった先生方の著書を高校生の時から読んでいたのです。

学長の仕事について少しお話をしますと、法政大学の場合は総長と言いまして、理事長を兼ねています。教職員によって選挙で選ばれたことは、教職員が抱えているさまざまな問題を解決してほしいという希望でもあるわけで、現場に敏感でなければならないと思っています。ただ、実際に総長になってみますと、なかなか教職員の所に行けず、現場が見えないことが現在の悩みです。

企業と大学の経営は全く違います。大学の授業料はおおよそ決まっています。定員は厳格化されているため、収入はほぼ固定されてしまいます。その限られた収入の中で新しい時代に沿った変化をしていくことが常に求められます。そして、それを外に向けて発信することが非常に重要です。今申し上げたような大学が持つ



ている矛盾や困難を、大学は乗り越えていかなければなりません。

この3大学で協定を結ぶことは、私にとって非常にありがたいことです。大きな団体の中では率直に相手の大学のことを言うことはなかなかできませんし、規模や性質が違っていると、抱えている課題も異なります。ただこの3大学ならば、お互いの大学のことを、時には批判し批評し合うということもあり得るかもしれない。私は実はそれに期待しておりまして、あまり褒め殺ししないで、「ここはまずいんじゃないか」と率直に言い合える関係にしていきたいと思っています。

◆学生・教職員・校友・保護者、多様な力が大学の支え

土屋 大学は企業と違って、利潤を上げることが目的ではありません。財政基盤の健全化などの諸問題に対し、理事会や校友会、父母会と、どういう形で全体の意思を統一していくのかが大きな問題です。

また、明治大学の場合には全国各地に地域父母会、その連合組織である連合父母会のほか、韓国や台湾にも父母会があります。私もソウルに行き、留学生の保護者の方々に成績表をお見せし、大学について説明をしてきました。

そうしていろいろとところへ行き、時には体育会への挨拶にもまわります。3大学は体育会が強いです。アメリカンフットボールやラグビーなどで3大学定期戦をしたいですね。そこに他大学も参加できるようにして、学生や地域の人々にも見に来てもらえるような大学対抗定期戦が実現すれば、日本の大学スポーツをもう一度立て直すきっかけになるのではないかと思います。

芝井 父母の会、保護会にあたる関大の教育後援会は、1947年に創設され、今年70周年を迎えました。5月の総会の出席者が約6000人に達する大きな組織です。夏休みには、私も成績表を持って全国を回り保護者の方々と話をしてきました。ゼミでは、目の前の学生だけを意識しがちですが、その向こう側にはご家族がいらっしゃることの重みを強く感じるようになりました。親御さん

■鼎談



研究を切り離し、その成果の社会貢献だけを問うのではなく、研究そのものが社会や世界を変えていく、あるいはインパクトを与えていくことが重要だと思っています。

田中 優子 (たなか ゆうこ)

1952年神奈川県生まれ。74年法政大学文学部卒業。80年法政大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。法政大学社会学部部長を経て、2014年4月に法政大学総長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。『江戸の想像力』『江戸百夢』『自由という広場』など著書多数。サントリー芸術財団理事、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会「東京2020有識者懇談会」委員などを務める。



も私たちも、学生本人がしっかりと自立し社会の中で活躍してほしいと、共に学生の成長を期待しているのですから、ある種の共通の目的で結ばれていると思っています。

田中 保護者組織である法政大学後援会と関西大学教育後援会はほぼ同時期につくられました。このような組織の創設の背景には、戦争があります。爆撃などで校舎を失った私立大学は、戦後、自力で再出発しなければならませんでした。そういう時に学生の父母たちが集まり、大学の復興を目指して一緒に立ち上げてくれたという歴史があるのです。お子さんが卒業されても、大学を支えて教育の機会拡充に寄与したいという高い志をお持ちの方々が多く、非常に重要な組織だと思っています。

大学は学生と教職員だけで閉じられているわけではなく、さまざまな組織、チャンネルを持ちながら社会全体に広がっているのです。

◆3大学の連携で生まれるもの

芝井 少子高齢化が進む日本の私立大学にとって、これからはますます厳しい時代になっていくことでしょう。その中でも、高等教育の充実を図らねばなりません。例えば、グローバル化に対応する人材育成に取り組む際、1つの大学ができることはその大学がもつ力量の範囲でしかありません。しかし、3大学が力を合わせれば、もう少し手応えのあるプログラムを実行できるかもしれ



留学生の受け入れ窓口を、3大学で共通化することで、留学生の受け入れが広がり、より活発になると思います。

土屋 恵一郎 (つちや けいいちろう)

1946年東京都生まれ。70年明治大学法学部卒業。77年明治大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学。93年より明治大学法学部専任教授。法学部長などをを経て、2016年4月に明治大学長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。『怪物ベンサム』『正義論/自由論』など著書多数。一般財団法人親世文庫理事、特定非営利活動法人JAFSA(国際教育交流協議会)理事などを務める。



ません。日本の大学が直面する多くの課題について、1つの大学でできることと、共同で取り組めることを、いいバランスで保たないといけないだろうと思っています。

田中 この3大学ほどの規模をもつ総合大学は、「日本の大学」から「世界の大学」へと変わらなければなりません。日本人だけでなくアジアの学生を中心として、さまざまな学生を育てることは、今以上に必要となるでしょう。しかし、英語で指導できる教員も不足していますし、留学生のインターンシップの受け入れ先企業の開拓が追いついていないのが現状です。例えば海外で実施する留学説明会などは、個別の大学で実施するのは非常に非効率ですから、3大学で協力したいと思います。

土屋 ASEAN地域や中国からの留学生の受け入れ窓口を、3大学で共通化することで、留学生の受け入れが広がり、より活発になると思います。明治大学はタイのバンコクにアセアンセンターを設置しており、そこに集まった現地の学生に日本から教員が出向いて、指導しています。今回の連携を契機に、各大学がASEANなどの地域に設置しているセンターを利用し合うことで、大学の国際化、そしてアジアにおける存在基盤を確立するための一つの出発点にできるのではないのでしょうか。連携することで力を倍に強化していくことが大事だと思います。

◆各大学独自の試みと連携だからできること

土屋 この数年間、大学の役割を大きく変えたのは東日本大震災の時でした。明治大学からも教員が中心になって震災復興、地域振興のために学生を連れてボランティアに行きました。一番印象に残っているのは、震災の年のクリスマスに、岩手県大船渡市に設置したツリーです。それまでは夜になると一切灯りのなくなっていた場所でした。子どもたちがその灯りを見ただけで感動して泣いているのを見た時、私は社会の現実とつながることも大学の大事な仕事だと感じました。

社会とのつながりは国内に限ったことではありません。明治大学はUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)と締結した協定のもと、難民の学生を受け入れており、周囲の大学にも働きかけているところです。

明治大学は、伝統的に変化に機敏に対応してきました。これからは変化することを恐れず、「移動と自由の時代における大学」にあるべき大学の姿を見据えていきたいと思っています。

芝井 私は学長に就任するにあたり、3つの柱を掲げました。1つは「ダイヴァシティ」を実現しながら、今後の大学を方向付けること。2つ目は「エコ・キャンパス」です。大学が社会の中で持続可能であるためには、地球温暖化に代表される地球環境問題に対して、大学の姿勢をはっきりさせることが必要。そのためには、エコロジカルな視点を組み入れてキャンパス全体を運営することが求められます。

3つ目は「ベンチャー・キャピタル」です。ベンチャー育成の取り組みを行う大学は増えつつありますが、まだまだ学生の多くは安全志向で、企業に就職しようという志向が強い。それ自体は悪いことではないけれど、仕事が大変だからと公務員になることを目標にする現状は、日本社会としては困ります。そのような中、「ぜひアイデアと志をもって起業してみませんか」と呼びかけたところ、本学のスタートアップ窓口を通じて、この1年間で20社以上のベンチャーがスタートしました。

大学からの起業はこれからも増えるでしょう。大学の役割はい



日本の大学が直面する多くの課題について、1つの大学でできることと、共同で取り組めることを、いいバランスで保たないといけないだろうと思っています。



芝井 敬司 (しばい けいじ)

1956年大阪生まれ。78年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月に学長に就任。独立行政法人日本学術振興会大学教育再生プログラム委員会専門委員。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。主な共著に「新しい史学概論」「EUと日本学—「あかぬさす」国際交流—」など。



ろいろあると思いますが、「社会問題を解決するためのソーシャル・ビジネスをつくり出すインキュベーションの場としての大学」という捉え方もありではないかと思ひ始めています。

田中 大学は教育・研究・社会貢献の3つを軸にしていますが、この3つは別々ではないと、今のお話から感じました。

法政大学は「持続可能な地球社会の構築」をビジョンとして掲げています。この持続が不可能になる要因はたくさんあります。少子高齢化で破綻する自治体が増える、もしくは戦争が起こる、こうしたことで持続は不可能になります。そういうことを考えた時に、大学は社会と共に何ができるのか、社会に対して何がきめるのか、日本が迎えるであろう危機にちゃんと向き合わなければなりません。

軍事研究はしないという宣言を3大学とも出しています。軍事研究とは何か、軍事研究に研究者が関わる時に何が問題になるのか、これからは私たちは考えていくでしょう。研究を切り離し、その成果の社会貢献だけを問うのではなく、研究そのものが社会や世界を変えていく、あるいはインパクトを与えていくことが重要だと思っています。

もっと3人で話し合いたいことが生まれてまいりました。このようにして3大学は、理想、あるいは実現すべきことを話し合いながら、社会の中で一定の役割を果たしていきたいと思っています。



●学長 芝井 敬司

法政大学・明治大学・関西大学

3大学による 連携協力協定締結までの 経緯と今後について

大学創設の起源を同じくする3大学それぞれの理念を生かして、優れた人材育成と真理を探究し、社会発展に寄与していきたい

◆連携協力協定の締結に至る経緯

2016年10月に学長に就任し、同年11月の創立130周年記念式典に向け、本学の歴史を読み直す機会がありました。その時に、法政大学、明治大学、関西大学の3大学が創設時から多くの共通点を有していたということに強く意識しました。

そこで、田中優子法政大学総長、土屋恵一郎明治大学長のところに就任のご挨拶に伺った際に、この3つの大学で連携協力し、さまざまな課題に向き合い、解決するために努力してみませんかというお話をさせていただきました。田中先生も土屋先生も即座にご賛同いただき、その後、それぞれの大学・部署における検討を経て、無事に機関決定を済ませ、協定調印に至りました。

◆3大学はいずれも ボアソナードの弟子達が創った法学校

私立大学の原点は建学の精神にあると私は認識しています。建学の精神には創設者の魂が込められています。これを土台にそれぞれの大学が発展し、大学の独自性を形成し、特色をつくってきました。

法政、明治、関西大学の3大学は、ギュスターヴ・エミール・ボアソナードの薫陶を受けた、若き法曹家たちが中心になって、いずれも1880年代に創設された法律学校に起源を持っています。

フランス人法学者でパリ大学の教授であったボアソナードを招請したのは、時の司法卿だった江藤新平でした。江藤新平は1871(明治4)年9月に司法省明法寮という、司法官を養成するための学校を設置します。後に司法省法学校となったこの学校が、ボアソナードとやがて若き法曹家になる大学創設者たちとの主な接点でした。

それゆえ3大学は他の私立大学とは、多少異なった性格を持っています。福沢諭吉、大隈重信、新島襄といった、1人の著名な創立者の思想に従って設立された大学ではありません。また、キリスト教のミッションや仏教の宗派を背景にして創設された大学でも、あるいは、熱心な教育家が創設し、創業者の家系の者が学校経営にあたる法人でもありません。3大学は複数の創設者の協力によって設置・運営され、基本的に市民主義と世俗主義を特長に発展してきました。

明治大学の「権利自由、独立自治」、法政大学の「自由と進歩」、関西大学の「正義を権力より護れ」と表現される建学の理念・学風には、国家主義あるいは権威主義的な支配を嫌い、個人と自由を尊重し、平和で公正な法の支配をこの社会に確立したいという思いと姿勢が反映されています。

◆共通課題に対して連携・協力。 教育界全体に貢献

3大学の卒業生の数はいずれも50万人前後に達し、現在、それぞれ文理にわたる10以上の学部と大学院を有し、所属する学生数は約3万人、6000人以上の入学生定員を持っています。

このように有数の規模を持つ私立総合大学として、教育、研究、社会連携、国際活動、大学運営をはじめとして多くの共通課題を抱えています。3大学で情報交換をしながら、共同の取り組みを進めていくことは、日本の高等教育全体にとっても、大きな意義を持つものになるのではないかと考えています。

一例を挙げれば、国内留学の実現に着手したいと考えています。日本の大学には、学生をあまり外に出そうとしないという伝統があったように思います。ヨーロッパにはエラスムス計画があり、学生がEU内のさまざまな大学に出掛け、新たな学びの機会、新たな友や先生、あるいは教育プログラムと出会うことを保証できる計画を積極的に進め、大きな成果を上げています。今回の協定を契機に、ぜひ3大学が協力して国内留学の制度を整え、日本国内の学生のモビリティを高めていきたい。それぞれの大学の理念・特色を生かした大学間連携活動を通じて、優れた人材の育成と真理の探求という大学本来の使命を実現し、地域社会ひいては国際社会の発展に寄与していきたいと考えています。



LEADERS NOW!



人に寄り添い 背中を押せる歌を

デビューから1年でさまざまなシーンで活躍

●経済学部 4年次生
花房 真優さん

デビュー以来、「人に寄り添い、背中を押せる歌を届けたい」という想いを秘め、さまざまなシーンで存在感を発揮している花房さん。言葉で想いを伝えることが苦手だったという花房さんは今、シンガーソングライターとしての道を着実に歩んでいる。



新曲「You can fly」
花房 真優
2017年12月27日(水)全国発売!

花房 真優 — はなふさまゆ

■1995年12月、大阪府高槻市生まれ。経済学部4年次生。シンガーソングライター。2016年春から本格的に活動を開始し、数々のコンテストで賞を獲得。「命はじまり」は映画「不登校の真実」DVDの主題歌に。神戸美女コンテストでは「ジャパンエンターテインメントグランプリ」に輝くなど、幅広く活躍中。Blood Orange Records所属。

葉を武器に、さまざまなシーンで存在感を発揮している花房さんだが、原点は「言いたいことを言葉でうまく伝えられない苦しみ」だったという。「小さい頃は引っ込み思案でしたね。特に小学校4年の時に転校し、友達も少なくさみしかったです。環境の変化になじまず、自分の言いたいことがうまく伝えられずにいた10歳の頃、花房さんを音楽の世界に導いたのが映画「タイヨウのうた」だった。難病を患うミュージシャンの少女と、平凡な少年との純愛映画。主演を務めたシンガーソングライターのYUIが、劇中で歌う曲に感銘を受けた。「その映画で流れる音楽を自分も歌ってみたいと思いました。あまり取り柄や特技が無い私でしたが、唯一『上手いね!』と褒めてもらえたものが歌で、もっと褒めてほしいという気持ちがありました」。そこから父のギターで弾き始め、想いをコードに乗せる日々を過ごした。



ライブハウスで演奏する花房さん

高校3年の文化祭では、満員の体育館のステージで「心ひとつに」などオリジナルソングを披露すると、多くの同級生から「この曲を聴いたら自分も頑張れる」「元気が出てきた」という声を掛けられた。自分も人のために力になれると知り、歌で背中を押したいと思うようになった。それまで自分のためだった「歌」が、人のための「歌」へと変わった。「いつか満員の武道館でライブをすることが目標です」。自身のファンを「真優クラスタ(房)」と名付ける花房さん。小さな花や実が群がり一つの塊となる房のように、居場所を与えてくれた音楽で1人でも多くの人の背中を押したい。人の心に寄り添う想いを、花房さんはこれからも歌に乗せ届け続ける。

阪急メンズ大阪独自の プラスαの 魅力をご提案

スタイルメイキングクラブは大人の男のオシャレ塾

●株式会社阪急阪神百貨店 第1店舗グループ
阪急メンズ大阪メンズインターナショナルファッション
販売部長兼パーソナルサービス部長
西ヶ峰 充宏さん — 社会学部 1993年卒業 —

「ワンランク上の大人の世界へ」そんな世界を提案するのは、阪急メンズ独自の会員制サービス「スタイルメイキングクラブ」を牽引する西ヶ峰さん。テレビ出演や新聞連載、各種セミナーでの講師役を通じてメンズファッションのコーディネート提案している。

世界に名だたるファッションブランドが一堂に会し、「世界の正統派ファッションを極めるフロア」と銘打たれた阪急メンズ大阪3階の中心にあるのが、「スタイルメイキングクラブ」の舞台。ゆったりとした上質な空間で、専属のスタイリストが会員の要望に応じたコーディネート提案している。濃紺のスーツにホワイトシャツ、そしてスーツと同系色のネクタイ、茶褐色の革靴に身を包んだ西ヶ峰さんは「スタイルメイキングクラブは、お客様に最もふさわしい洋服を館内からお選びしてご提案することが可能です。人生のさまざまな節目をはじめ、パーティーやイベントなどTPOに応じた装いのご相談が多いですね。フィッティングをしても、売場を移動する間に前に着た服の感覚は薄れてしまいます。ここでは気になる洋服をスタッフが各売場からご用意しますので、ブランドやフロアの垣根を越えて着比べることができます」と言う。

2008年、「サービス=無料」の慣例を打ち破るように入会金が発生する同クラブを発足。「当時はインターネット通販が右肩上がりに伸びていた時代でした。阪急メンズ大阪及び阪急メンズ東京(2011年)には、コーディネートだけではなくパーソナルカラー診断やお手入れ方法のご提案など、プラスαの魅力をつけることで、百貨店でのお買い物に価値を見出していたらこうという思いがありました。自ら積極的にメディアに露出したことや、阪急メンズ監修で4万部を売上げたファッション誌「大人の男のオシャレ塾」の反響もあり、今では会員数は大阪と東京合わせて約5,000人に上る。近年は婚活コーディネートの相談も多く、「イベントに出席するとたくさんの方からアプローチをされるようになりました」との声も寄せられるとのこと。



西ヶ峰 充宏
— しがみね みつひろ
■1969年奈良市出身。93年関西大学社会学部卒。ネクタイ売り場からインターナショナルブランドまで、あらゆるメンズ分野に精通。顧客目線を大切に、雑誌や新聞等を通じ、メンズファッションの啓蒙活動を行う。高校から社会人リーグを通じて計18年間アメリカンフットボールを続ける。

「着こなしの上達法は洋服の文化的背景を知ることです。例えば、洋服の素材やディテールを大切に文化のあるイタリアのシャツは繊細ですから、文化や慣習の違う他国でそのまま展開しても必ずしも受け入れられるとは限りません。湿度、紫外線、街並み、そして洗濯事情などの背景があるからです。その国々の文化を理解し、コーディネートと時代背景を『まとめる』ことで、オシャレ度はアップします」と明かす。西ヶ峰さんが講師を務める各種セミナーも好評だ。「日本のしきたりとして重要な要素である『締める』『結ぶ』『留める』などのワードは、ビジネススタイルにも表されます。だからこそ、しっかりとネクタイを『締める』、紐を『結ぶ』、ボタンを『留める』ことで、印象は各段に良くなります。また、体型では『胸囲-胴囲=14cm』が黄金比の差寸で、洋服は最も格好良く見えます」と講師の顔を見せた。

自らのビジネスファッションを「出来るだけ控え目に」と決めている。華やかに着飾ることで初対面の人に与えてしまう「より高価なものを勧められてしまうのかな…」という不安を無くすためだ。20年以上愛用している名刺入れを手に、「本質を見抜き、長くご愛用していただけることを伝えることが大切です」と胸を張る。大学卒業から25年間、黄金比の差寸「14cm」を維持する西ヶ峰さんは「お客様の婚活、結婚、お子様の誕生、昇進など、人生の節目を飾ったスタイルを記念写真と共にご連絡いただいた瞬間は、本当に嬉しいですね」と格好良く笑った。

不登校児を対象にした富山県のフリースペースを舞台に、当事者や関係者のインタビューを織り交ぜたセミドキュメント映画「不登校の真実」。「生まれた日に浴びた光をあなたは覚えていますか?」の歌詞で始まる花房さんの「命はじまり」は、同映画DVD主題歌としてエンディングを彩った。独特の低音とのびやかな高音、更には魅惑的な裏声で見る者に命の大切さを届けた。「まさか私の曲が映画の主題歌に選ばれるとは思っていませんでした。凄くうれしかったです。映画の試写会の時に、ウルウルと涙が溢れてきたのを今でも覚えています。二十歳を前に、育ててもらった両親や周囲への感謝を忘れてはいけないという思いから「命はじまり」は生まれた。感情のままに浮かび上がる言葉を紡ぎ、1週間程で完成させた。同曲のプロモーションビデオでは、妊婦の方がアルバム写真をめくるシーンから始まる。「人が生まれた瞬間は、赤ちゃんだけが泣いていて、周りの皆はほっこりとした笑顔になります。人が泣いている姿を見て、周囲が喜ぶ瞬間は誕生した瞬間だけかなと思いました」とほほ笑んだ。

プロの歌手になるため、自由な校風で見識を広められると思い関西大学経済学部に入學し、2016年春に本格的に音楽活動をスタート。数々のコンテストで賞を獲得し、映画主題歌やテレビ番組のエンディングテーマソングにも多数起用され、ShibuyaCross-FMラジオ「SSW SONG BOX」のメインパーソナリティを務めるなど、デビュー直後から精力的に活動の場を広げている。言

▲想いを綴った作詞・作曲ノート

■研究最前線

外国語の学習方略に関する研究

小学校英語指導のための 校内教員研修システムを構築

英語活動における教員の不安軽減に焦点をあてて

◎外国語学部

池田 真生子 教授

急速に進むグローバル化に対応するため、今年3月、文部科学省は新学習指導要領を公示。2020年度より、小学校における英語に親しむ活動の開始時期を現在の5年生から3年生に早め、5年生からは英語を教科化することとなった。活動の本格化に伴い、指導する小学校教員の不安が多く報告されていることを受け、池田真生子教授は、小学校校内での教員研修システムの構築について研究を進めている。



■追いついていない小学校英語の教育現場

—先生はさまざまな教育機関で講演や研修を担当されています。新学習指導要領導入を前に、小学校における英語教育の現状はいかがでしょう？

現場では先生方への研修が間に合っていないと感じます。小学校英語の教科化は2018年度からの先行実施も認められており、社会のニーズなどから、ほとんどの小学校はなるべく早く取り組みたいと考えています。しかし、それを実施する小学校の先生方は、英語を教える資格を持っていません。British Council (英国の公的国際文化交流機関)による中央研修や、中学校の外国語(英語)2種免許を小学校の先生方に取得してもらうための講習等が、文部科学省の肝いりで実施されていますが、日本の公立小学校の数と、そこで教える小学校教員の数を考えた時、焼け石に水の状態です。このため、今の状態で果たしてきちんと教えていけるのか、つまりサステナビリティ(持続可能性)があるのかを、学校管理職の先生方や教育委員会指導主事の皆さんはもちろんのこと、現場の先生方が大変不安に思っているようです。

—その不安を軽減するために、英語指導のための校内教員研修システムの研究を開始されたのですか。

はい。世界的に見ると日本の状況は特殊です。海外では新しいカリキュラムが導入される際、夏休み期間等を利用し、場合によっては何年も掛け、事前にしっかりと必修の教員研修を実施します。日本でも文部科学省が中心となって研修を計画・実施されていますが、なかなか追いついていないのが現状です。

課題として見えてきたのは、研修成果が、掘野(教室で授業をする小学校教員一人一人)まで広がっていないということです。その一因は、研修の多くが夕方に研修センターなど校外で行われていることにあります。この時間帯は児童や保護者の急な対応が入る

ことも多く、先生方が学校を離れること自体が大変です。また、センターなどでの研修には各校の代表者が参加されるケースが多く、その情報が校内で十二分に共有されていないことも要因と考えられます。そこで、私を含め本学の英語教育学専門の教授3人で、持続可能な校内教員研修システム構築の研究を始めました。

■学生を派遣する新しい校内教員研修システム

—校内教員研修システムの特徴を教えてください。

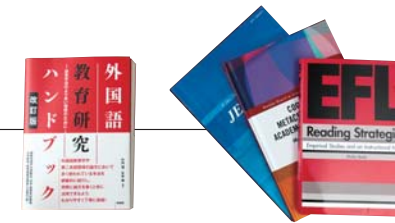
最も特徴的なのは、大学教員の指導の下、大学院生・学部生が小学校を訪問し、校内教員研修を支援するということです。学生がTA(ティーチング・アシスタント)として授業に入り児童を支援することはありますが、教員の研究を支援するケースは他にありません。特に本学の場合、外国語学部で教員免許取得のために勉強している学部生や外国語教育学研究科で、中・高等学校の英語教師になることを目指している大学院生が多くいます。彼らにとっては学校現場を垣間見られる大きな学びの機会であり、小学校教員からは研修支援のニーズがある。両者を結び付けることで、互助の関係を築けるのではと考えました。

—システムの導入はいつからですか？

吹田市の教育委員会と提携し、2014年度からプロジェクトとして導入を開始しました。現在の派遣校は3校で、各校のニーズに合わせて、年に3~7回の研修を実施しています。本当はもっと多くの小学校に学生を派遣したいのですが、それだけの準備を整えた学生を育てるのが難しいところ。研修では学生をペアで行動させているため、派遣校数が増えればそれなりの人数が必要です。そのため、研修システムを構築できるまでは、研修の質を保証できる範囲で実施しています。

—どのような流れで学生を派遣するのですか？

まず、学習意欲が高い教職志望の学生を中心に声を掛け、事前



Development of a Sustainable System of In-service Teacher Training

研修を夏休みに5日間集中で受講してもらいます。これは、小学校英語を専門分野の一つとした本学研究科修士生が担当します。その後、9月頃から各校へ派遣を開始します。

校内教員研修の内容は学生に負担がかかりすぎないよう、活動案と教室英語の効果的活用の紹介という2つに設定(小学校からの要望に基づく)。事前のあいさつや打ち合わせにも学生が赴き、各小学校別の細かなリクエスト等も勘案して研修を支援します。

—実施後の手応えはいかがですか？

小学校教員は、自校内で研修を受けられるようになって負担が軽減されました。研修後の反応としては、多数の参加者が満足と表明しており、知識・技能の習得に加え、「明日からの授業に役立つ内容を練習できた」「さまざまな活動案を知り、授業をイメージ出来るようになってきた」「教員同士のコミュニケーションの場になった」などの評価を頂いています。また、外国語活動の目標には、「文化についての理解を深める」ことも挙げられていますが、小学校教員にとっては、異文化を活動に取り入れるのが難しいようです。その点、本学の学生は、英語を専攻し、留学経験者も多く、異文化に対する知識や経験も豊富。その強みを生かした活動案を提供できたことも、好評を得られた要因だったと思います。

一方、学生は現場の教員の考え方を間近で感じ、事後アンケートでは「とても勉強になった」と全員一致で述べています。もちろん、プロの前で話すという負担はあるため、それに関しては「完成した活動案を持って行く必要はなく、元ネタを準備しディスカッションの機会を提供するという意識で臨むように」と随時伝えています。

また、実施して初めて分かったのですが、大学教員が直接関与するより学生を派遣した方が、小学校教員同士の議論がより活発になるようです。その一方で小学校教員からは教育者の先輩として学生にアドバイスもたくさん頂いており、より良い関係性が生じていると感じます。

—今後の課題をお聞かせください。

現在、校内教員研修システムの実施は吹田市内の3校のみなので、もっと多くの学校で出来るよう学生の人数を補強したいですね。

また、何年も同じ小学校で研修すれば需要も変わるはずですが、英語教育の受け入れ準備が出来ている小学校とそうでない小学校の違いもあります。それにこうした異なるニーズに応じて、研修の在り方を変化させることも、今後の検討課題です。研修の最大

の目的は先生方の不安を軽減することであり、それには先生方の自主性が重要。ゆくゆくはリクエストの割合がもっと高くなって良いと思っています。



これまでの研究で、学生派遣型の校内教員研修では、管理職のリーダーシップや教員間のチームワークが鍵となることが分かってきました。こうした研究知見を統合して、最終的にはサステナビリティのある研修システムを構築し、先生方が不安なく児童と授業をできることに貢献できればと思っています。

■人生の早い段階から自身の学習をマネジメントできるように

—今後の抱負をお聞かせください。

専門の外国語学習方略では、どのように英語を学習するのが効果的か、その学習方法をどのように学習者に伝授すればよいかを、指導方法、教材、学習環境などの観点から研究しています。この道に進んだのは、私自身が学生時代に英語の学習方法で苦労し、大学院で英語教育学を学んだ際に、「もっと早く、この内容を教えて欲しかった！」と強く感じたから。学生が私と同じ思いをしないよう、少しでも早い時期に英語の学習方法と、その方法が良い理由を伝えたいと思ったのです。このことは、広い意味では教員研修や小学校英語にも応用できます。より効果的な学び方を知ることは、「魚をもらう」だけではなく「魚の釣り方を教えてもらう」ということです。釣り方が分かれば、研修以外の場でも自分で学ぶことができます。また、釣り方を小学校の早い時期から徐々に学ぶことで、長い道程となる英語学習を自分でマネジメントする力が付くでしょう。今後はその意義や共同学習についても先生方にお伝えしていきたいですね。

英語は他教科と違って新たな方針が提示されることが多く、その度に現場の先生方は大変な思いをされています。けれど、児童の成長を思い、懸命に努力されています。だからこそ、私たちは支援員の役割を果たせる学生をしっかりと養成し、先生方の自主性を更に高め、持続性のある研修システムを提供していきたいと思っています。私にとって学生の育成は後進の指導にも相当します。彼らの成長する姿を見ることは、一番の楽しみでもあります。



▲小学校で行われる校内教員研修の様子。教職を志望する外国語学部の学生が研修を実施する

研究最前線

次世代電池の研究

全固体電池のための
イオニクス材料探索

電気を効率的に利用する社会に向けて

◎化学生命工学部
荒地 良典 教授

スマートフォンや電気自動車などで利用が広がるリチウムイオン二次電池。しかし、普及と共に発火などのトラブルも急増している。そこで、安全でエネルギー密度の高い新しい電池の開発が望まれている。そんな中、次世代電池の有力な候補として、研究開発競争が活発に繰り広げられているのが全固体電池。化学生命工学部の荒地良典教授のイオニクス材料研究室は、全固体電池の実用化に向けた材料探索に取り組む。

電気自動車普及の鍵を握る全固体電池



高速イオン伝導性をもつ粉末の合成

—イオニクス材料研究室では、どんな研究をされているのですか？

イオニクスという言葉はあまりなじみがないかもしれませんが、エレクトロニクスが電子の現象を扱うのに対して、イオンの現象を扱うのがイオニクスです。私の研究室では、特に次世代の二次電池「全固体電池」のための新しいイオニクス材料の探索をはじめ、合成や構造の解析に取り組んでいます。

—全固体電池とはいった物ですか？

電池には電気を起こす電池もあれば、電気をためる電池もあります。私達が研究しているのは、発電するだけの使い切りではなく、使った後に電気をためればまた使うことができる蓄電池。これを二次電池といいます。

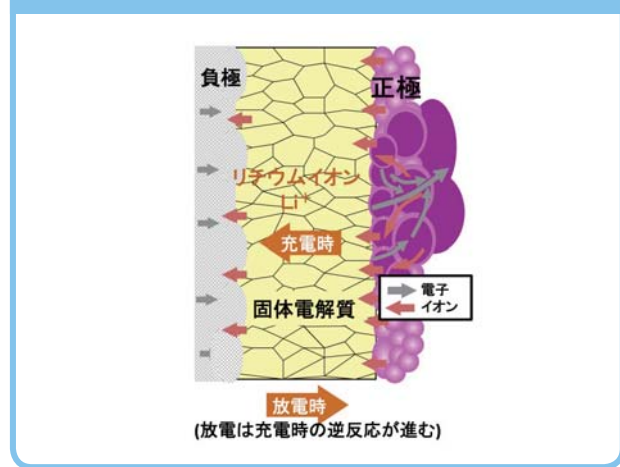
鉛蓄電池など二次電池は昔からありましたが、現在、広く使われているのは、リチウムイオン二次電池です。電池はプラス極とマイナス極と電解質からできていて、リチウムイオン二次電池の場合は、リチウムイオンが両極間の電解質を通じて動いています。

リチウムイオン二次電池はエネルギー密度が非常に高く、軽く、場所もとらないので、スマートフォンやノートパソコン、自動車など、生活の身近なところで利用されるようになりました。しかし、電解質は可燃性の有機溶媒のため、液漏れや発火の危険性があるなどの短所があります。

全固体電池の電解質は従来の液体に代わり、固体材料を用いた



■ 固体電解質を使った全固体電池 (イメージ図)



新しい電池です。電解質を固体にすることで、液漏れのリスクもなく、燃えにくく、安全性が向上します。液体よりも低温から高温まで広い温度の範囲で利用でき、その上、1つのセルに電極を直列に何層も重ねられるため、高い電圧を得られるなどの長所もあります。

フランスでは、2040年にガソリン車、ディーゼル車の販売を禁止するという政策が発表されました。大気汚染の深刻な中国でも電気自動車への移行が鮮明です。しかし、自動車がガソリン車から電気自動車へと完全にシフトチェンジするためには、今よりも安全性が高く、走行距離も長くできるようにしなければなりません。そのために欠かせない次世代電池として、全固体電池に大きな期待が寄せられているのです。

正極・電解質の界面のイオン伝導を活発に

—全固体電池は実用化に近いのですか？

現状はまだ模索段階です。電解質に硫化物を使うものと酸化物を使うものの研究がそれぞれ進められています。私達が研究しているのは酸化物型ですが、市場に出るのは電解質材料の開発で先行してきた硫化物型の電池が先になると思います。硫化物は柔らかいので、電極と電解質の接合もしやすく、イオンの出入りもしやすい。しかし、固体であっても硫化物は空気中の水と容易に反応して、毒性のあるガス(硫化水素)を発生します。ですから、大気にさらすことができません。気密性を確保する必要があります。一方、酸化物は大気にさらしても、有毒なガスの発生や燃える心配はありません。酸化物ならば、解決しなければならない課題は多いのが現状ですが、より安全性の高い究極の電池として実用化できる可能性があります。

—先生はどのような課題に取り組まれているのですか？

プラス極と電解質の間で活発にリチウムイオンが入り出せるように、いかにそこにアクティブな界面を構築するかを目的に研究しています。プラス極と電解質の界面が重要な課題だということは、多くの研究者が分かっていたことですが、同時に難題であることも認識されていました。そのような状況でしたが、「究極の電池を作りたい」という思いから、まだまだ課題の多いこの研究を始めることになりました。

—成果が出せるという確信はあったのですか？

2013年に始まった国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の先進的低炭素化技術開発(ALCA)の次世代蓄電池プロジェクトに参加し、この研究に本格的に着手しました。その時には、何とかするという手応えは全然ありませんでした。ただ、以前研究していた燃料電池(SOFC)の技術、反応プロセスを応用すればうまくいくかもしれないという考えはありました。初めの頃は、やれどもやれども試作の電池がまともに動かない。今はやっと動くようになりましたが、実用で使えるような出力を出すまでにはほど遠い。それでも、動かないものが動くようになったことは大きな進歩です。

電気を効率的に利用する社会を目指して

—今後の研究はどのように進めていく予定ですか？

エネルギー密度を上げるためにプラス極を厚く、抵抗を小さく



▲電池性能を調べている様子

▼グローブボックスの中で全固体電池を組み立てる様子



して電気を効率的に取り出すために、電解質はできるだけ薄くしていきたい。それを可能にする新しい正極材料となる物質の探索、合成を継続していきます。

天然の鉱物をヒントに、こういう原子の並びならば動くのではないかと、いつも頭の中で立体的に原子の配列を思い浮かべています。元素の候補を選び、すり鉢で粉をすり合わせ、グローブボックスの中で電池を組み立てる。地道な作業も多いですが、想像もできない物質を自分で作れるかもしれないという面白さがあります。

そして、これまでは電池を動作させることを優先に取り組んできましたが、動くことが分かった以上は、なぜ動くのか、どの部分が影響しているのかなど、イオンの位置や電子構造にも注目し見極めていきたい。そのために、大型放射光施設のSPring-8などの実験施設も利用しています。限られた利用時間の中、作業は深夜に及ぶこともあります。学外の施設を利用することは、学生達にとっては良い刺激になるようで、熱心に研究に取り組んでいます。

—このような研究に関心をもったきっかけは？

1986年4月、チェルノブイリ原発事故と高温超伝導体の発見という2つの大きなニュースが報じられました。私は当時高校生でしたが、チェルノブイリ事故を怖いと思いました。一方、この年の同じ月にセラミックスが超伝導を示すことが発見されました。それは液体窒素で冷やすと抵抗がゼロになることですが、その超伝導を示す温度が室温に近づけばエネルギー問題は一気に改善する。そういう材料を見つけることも魅力だと感じました。この2つの出来事は、科学の光と闇だと感じました。それから自分には何が出来るだろうと考え始めました。大学生になって、いろんなタイプの電池を研究している研究室に入り、燃料電池の材料研究に取り組んだことが現在につながっています。

2011年の福島原発事故の後、かつての私と同じ思いでいる学生がいるのではないかと、そんなことを想像しながら「マテリアルを勉強していることでやれることは必ずある」と話しました。

原子力発電だけに依存するのではなく、再生可能エネルギーをもっと多くの場面で活用できるよう、全固体電池の研究を進めていきたいと思っています。

Topics ■トピックス [学内情報]

◎文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に2年連続で選定

東アジア文化研究の一大拠点 「KU-ORCAS」を設立

デジタルアーカイブ構築とオープン化で、研究成果を社会に開く



関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長
外国語学部
内田 慶市 教授

文部科学省の「私立大学研究ブランディング事業」に、「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」がS区分(5段階の最上位)の評価を受け選定された。事業期間は2017から2021年度の5年間。
私立大学研究ブランディング事業は、学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組む私立大学等を重点的に支援するもの。本年度は188校からの申請があり、タイプA(社会展開型)に33校、タイプB(世界展開型)に本学を含む27校が選定された。
本学では昨年度の「人に届く」関大メディカルポリマーによる未来医療の創出」のプロジェクトに続く2年連続での選定(全国で7校、関西では本学のみ)となった。



(上) 木村兼隆堂 他
「大坂文人合作扇面」
(下) 野口小嶺「美人図」

本学は、東西文化交流研究において世界的に高い評価を誇る東西学術研究所、個人文庫をはじめ豊富な資料群を有する総合図書館・博物館、なにわ大阪研究を牽引するなにわ大阪研究センター、そして本学の源流である泊園書院の貴重な資料群である泊園文庫など、脈々と受け継がれ積み重ねられてきた伝統と実績のもとに、日本研究・アジア研究の豊富なリソースを独自に持ち合わせている。また、2007年には「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成一周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出」がグローバルCOEプログラムに採択され、文化交渉学という新たな学問分野の開拓や、大学院東アジア文化研究科・文化交渉学専攻の設置など、同分野における研究や教育活動を推進してきた。そして、これらの豊富な財産や実績を基盤とし、今年4月、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター“KU-ORCAS”(Kansai University Open Research Center for Asian Studies)を設立。このKU-ORCASを拠点に、「関大の東アジア文化研究」を更なる高みへと導いていく。



泊園書院を隆盛に導いた藤澤南岳



関西大学の源流の一つである泊園書院

KU-ORCASでは、東アジア文化研究に関するデジタルアーカイブを構築。アーカイブのデジタル化は、紙では見出せなかった新たな展開をもたらす仕組みとして世界的にもその推進が強く求められており、資料の保存という目的はもちろん、データの適切なタグ付けなどにより、隠れていた通関性の発見や他分野の関連資料の収集・俯瞰を可能とし、膨大な資料の比較・分析への道を開く。

例えば、本学が所蔵する東西接触に関わる資料(辞書・文法書・宣教師報告書等)と、海外の諸機関の蔵書を相互にリンクさせ統合するほか、総合図書館が所蔵する泊園文庫を中心とした典籍・日記類・院主作成碑文等や、高松塚古墳の発掘に象徴される本学の古代飛鳥・難波津研究が蓄積してきた発掘データ・出土品データ等もデジタルアーカイブ化し、本学の知とノウハウを結集。更には国内外の他大学・機関とも連携することで、東アジア文化研究のネットワークをつなぐ「ハブ」としての役割を目標としている。



坤輿万国全圖(バチカン図書館所蔵)



岡熊巖「桃山図」

耳鳥齋「別世界巻」

東アジア文化研究の オープン・プラットフォーム



東アジア文化研究デジタルアーカイブの構築

◎ユニット1 東西文化接触とテキスト

本学が所蔵するリソースを中核として、世界各国の主要研究機関の資料を含めた総合アーカイブを構築し、活用する。東西文化接触研究における世界有数の資料を有することで、国境を越えたアジア認識のグローバル化に寄与する。

- ▶ 構築するアーカイブ
- ・16世紀以降東西言語研究総合文献アーカイブ
 - ・近代漢語語彙コーパス

◎ユニット2 東アジアの中の大阪の学統とネットワーク

近世・近代の市民教育を担った泊園書院の活動を明らかにすることで、大阪の文化的地位を再評価する。また、大英博物館、ロンドン大学と協力して遂行する大坂画壇のアーカイブ構築と展覧会開催により、日本美術史上で埋もれていた大坂画壇の再発見をもたらす。

- ▶ 構築するアーカイブ
- ・WEB泊園書院
 - ・大坂画壇コレクション

◎ユニット3 古都・史跡の時空間

奈良県で新たにおこなう発掘調査により、第二の高松塚となりうる本学の実績を高める。また、本学が所蔵する古地図・絵図・古文書をベースに構築する歴史的景観復原データベースにより、近世・近代の関西に関する都市景観学の分野の開拓や、自治体や学校へのリソースの提供につなげる。

- ▶ 構築するアーカイブ
- ・飛鳥・難波津研究データベース
 - ・歴史的景観復原データベース

KU-ORCAS



デジタルアーカイブの様子▶▶

また、KU-ORCASは、社会に開かれた「場」、すなわちオープン・プラットフォームの形成と活用を推進する。構築したデジタルアーカイブを世界中のすべての人がアクセスできるようにするほか、「研究リソース」「研究グループ」「研究ノウハウ」をオープン化し、大学の「知」を社会へ開く。そして、東アジア文化研究者のみならず、異分野の研究者、企業、自治体、市民といった人々にとって真に「使える」デジタルデータを提供し、研究成果の社会還元を目指す。これまでの学問領域や人の垣根を越えた取り組みにより、今までとは違う新しい見方が生まれ、東アジア文化研究、ひいては人文学の世界に新しい価値をもたらすとして期待が寄せられる。

キックオフセミナーを開催

9月22日、東アジア文化研究の世界最高水準研究拠点を目指すKU-ORCASは、キックオフセミナーを開催した。テーマは「デジタル・アーカイブ化の先に見えてくるもの」。デジタルアーカイブの技術や具体事例の紹介等を通じ、デジタル化や資料のオープン化がもたらす可能性の広がりや、東アジア文化研究を中心とした人文学の新しい姿を探った。

講演会では4人の講演者が登壇。永崎研宣氏(人文情報学研究所)と引原隆士氏(京都大学図書館)は、それぞれ「SAT大蔵経テキストデータベース」や京都大学の貴重資料の電子化を例に、アーカイブ構築のノウハウを披露し、アーカイブ化とオープン化の今後の展開を示唆した。続く久永一郎氏(大日本印刷株式会社)、中谷伸生文学部教授は、「ルーヴルーDNP ミュージアムラボ」や大岡春子の絵巻「浪花及瀬川沿岸名勝図巻」の超高精細デジタル作品に言及しながら、デジタル化の事例や利便性を紹介した。セミナーは関西大学東京センターと千里山キャンパスの同時二元中継で行われ、約180人の参加者が興味深く聞き入った。

Topics ■トピックス [学内情報]

◎ 社会学部創設50周年記念式典

50年の歴史を振り返り、さらなる躍進へ

50周年を記念して刊行した
『関西大学社会学部50年史』



10月28日、社会学部創設50周年記念式典が千里山キャンパスで開催された。社会学部は、法学部・文学部・経済学部・商学部・工学部に続く関西大学で6番目の学部として1967年に創設され、旧天六学舎で授業を開始。翌年には自然に恵まれた現在の千里山キャンパスに移転し、今年4月に50周年の節目を迎えた。式典には、芝井敬司学長、池内啓三理事長、張済国客員教授(韓国・東西大学校総長)、中尾優司同窓会会長から祝辞があり、社会学部の歴史に思いを馳せるとともに、未来へ向けてさらなる発展を願った。



▲芝井敬司学長から学長表彰を授与された和田伸也さん

また、学長表彰式も執り行われ、7月にイギリス・ロンドンで開催された世界パラ陸上競技選手権大会2017の陸上男子(視覚障害)5,000mで、見事、銅メダルを獲得した同学部卒業生の和田伸也さんに表彰状と副賞が授与された。和田さんは、2015年の同大会に続く2大会連続で銅メダルを獲得。その国際的な活躍が、多様な人間の共生を重視する社会学部の理念を体現したものと賞された。

◎ 関西大学出版部 創設70周年記念講演会

『英米の絵本の窓から』



▲『英米の絵本の窓から』(石原敏子著)

関西大学は戦後の混乱期中、大学再興の指標となった「関西大学リネッサンス」構想のもと、学内情報組織を再編成し、1947年6月に出版部を創設した。目的は、関西大学における研究成果の発表を助成・促進し、学術の振興に寄与すること。そのため、欧米のユニバーシティ・プレスに展開の範を求め、一般の出版社が刊行しない学術図書も積極的に出版してきた。

その出版部創設70周年を記念して、11月19日、外国語学部の石原敏子教授による講演会が梅田キャンパスで開催された。講演では、石原教授が自著『英米の絵本の窓から』の執筆背景について語ったほか、お薦めの絵本を紹介。聴講した約90人の来場者は、絵本という小さな空間に広がる大きな宇宙について思いを巡らせながら、熱心に耳を傾けていた。



◎ 関大研究力 研究まとめサイトを新設

研究と社会をつなげる新たな玄関口



関西大学はこの度、学内の研究機関が取り組むさまざまな研究の成果や活動情報をまとめて発信する「関大研究力 研究まとめサイト」を開設した。

このサイトは、関西大学がこれまで着手してきた多様な研究情報を一括し、まとめて閲覧できる玄関口としての役割を担う。これにより、訪問者は各サイトにある研究紹介ページへのスムーズなアクセスが可能に。企業・研究者、メディア関係者、本学に関心のある学生や生徒等の属性による訪問者ナビ機能により、ニーズに合った研究ページへと素早く誘導される。今後は、研究情報発信のプラットフォームとして広く活用されるよう期待が寄せられる。



◎ 開設1周年記念 梅関祭

梅田キャンパスで行う関大生のための祭典



10月22日、梅田キャンパスの開設1周年を記念する関大生のためのイベント「梅関祭」が開催された。

当日は、梅田キャンパスのコンセプトである「人を導き、繋ぎ、自ら起こし、創る『人』を育成～『考動』を实践する場の創出」をテーマに、さまざまなイベントを展開。1・2階のBOOK & CAFEエリアでは、関大生パフォーマー達が華やかなショーを開催した。現役シンガーソングライターの花房真優さん(経4)もライブを披露し、その歌声で来場者を魅了した。また、上層階では学生団体企画のイベントをはじめ、関大がルーツのらぼぽぼ、五感、りくろーおじさんの店の人気スイーツが楽しめるスイーツフェス、トラックメーカー・tofubeats氏と本学卒業生の内田絢子氏によるトークライブ、大阪ベルェベル美容専門学校の協力によるネイル体験会なども開催され、多くの学生が会場に足を運んだ。

梅田キャンパスは、「スタートアップ支援」「異業種交流サロン」「社会人学び直し・生涯学習」の3つを事業柱に、2016年10月に誕生。集まった個性豊かで元気いっぱいの関大生によって、盛大で華やかな祝いの一日となった。



◎ 第40回関西大学統一学園祭を開催

「All One～進め、共に、頂へ～」



2017年度の関西大学統一学園祭が、11月2日から5日まで、千里山キャンパスで開催された。今年のテーマは「All One～進め、共に、頂へ～」。

第40回の節目を迎えた今年は3連休を絡めての祭典となり、予想を上回る多くの方が来場。サークルやゼミ等による210もの模擬店やフリーマーケットをはじめ、研究発表やステージ企画、講演会等、さまざまなイベントや催しでにぎわいを見せたほか、2日には卒業生のゆりやんレトリィバァさんが凱旋し、お笑いライブを披露した。

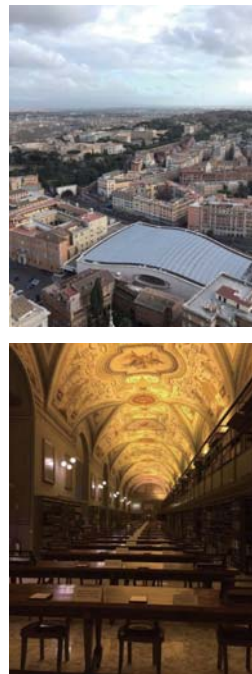


4日にはかりゆし58を迎えてのライブ演奏、5日には寛美和子さんによるトークショーも開催され、連日、会場は熱気に包まれた。さらに、統一企画構成委員会が運営する毎年恒例の3大イベント「K.U.ROCK FEVER 15th」、「Kandai Dance FESTIVAL 2017」、お笑い王決定戦「KANDAI Comedy Championship」も行われ、観客を巻き込んでの盛大なパフォーマンスが繰り広げられた。また、5日の夕方には、「後夜祭」が悠久の庭で開催され、約2,000人が集結して感動のフィナーレを迎えた。

■ 社会貢献・連携事業

◎ 日本の大学初！パチカン図書館と協定を締結

パチカン図書館所蔵のアジア関連資料の研究を始動



Biblioteca Apostolica VATICANA

関西大学は、カトリック教会総本山・ローマ教皇庁のパチカン図書館と、ローマ大学、北京外国語大学の4者間で協定を結び、パチカン図書館の所蔵する文献の調査を開始した。パチカン図書館は、15世紀にローマ教皇ニコラウス5世が設立した世界最古の図書館の一つ。歴史的文献の重要コレクションを多数収容しており、16世紀にイエズス会の宣教活動でもたらされた東アジアの資料も保有している。その中には、日本や中国で活動した宣教師がローマ教皇に送った報告書や書簡、日葡辞書、葡漢字典、更には日本の漆器の箱、印章なども所蔵されていることが分かっている。

このたびの協定締結は、これまで詳細が明らかにされてこなかった日本を含めた東アジア関連資料の研究を進めることが目的。これらの研究分野におけるパチカン図書館との協定は、日本の大学としては初めての締結となった。本学は今年4月、東アジア文化研究の世界的拠点「KU-ORCAS（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター）」を設立しており、今後、パチカン図書館が所蔵する資料のデジタルアーカイブ化とそれに伴う研究活動を主導していく。

◎ 今年も大規模避難訓練と防災イベントを実施

関大防災Day2017 ～広がれ！みんなの安全・安心！～



「安全確認シート」に記入する学生



災害用備蓄倉庫見学ツアー



消火器使用体験



炊出し試食会

関西大学では、毎年秋に全学を挙げて「関大防災Day」を実施している。今回は10月27日、千里山・高槻・高槻ミューズ・堺・北陽の5キャンパスで開催され、学生・教職員・地域住民ら約1万人が、地震避難・安全確認訓練に参加した。

千里山キャンパスでは防災イベントも開催し、炊出し訓練や火災時煙体験、消火栓・消火器体験、浸水時ドア開閉体験、災害用備蓄倉庫見学ツアーなどを実施。企業・団体による防災啓発ブースでは、災害対策用品や保存食等が紹介された。中でも、運搬や貯蔵が容易な軽油で走ることから災害時に役立つクリーンディーゼルの展示や、JR西日本による非常ボタンの動作体験会は注目を集め、参加者にとって災害に対する意識がより一層高まる一日となった。

また、国内の大学では初となる、大規模災害時の効果的な燃料輸送についての共同研究及び石油燃料配送に関する基本契約がシュワ株式会社と締結され、調印式が行われた。今後、同社と社会安全学部は共同研究を進め、大規模災害時における燃料確保の課題解決に向けた先進的な取り組みを推進する。



避難器具体験

◎ 関西圏のテレビ5局トップによるパネルディスカッション

テレビはどこへ向かうのか



▲司会を務める社会学部黒田勇教授

10月21日、関西大学は社会学部創設50周年を記念して、「テレビ5局トップによるパネルディスカッション」を梅田キャンパスで開催した。ライバル各社が垣根を越えて集結したこのイベントは、テレビ5局とマスコミ業界で活躍する本学OB・OG組織「関西大学マスコミ人会」の協力により実現。学生の幅広い社会的見識の向上に資することを目的で開催された。当日は、メディアに興味をもつ本学学生・生徒や京阪神の他大学学生ら約300人が詰め掛けた。

パネラーは、朝日放送、関西テレビ放送、テレビ大阪、毎日放送、読売テレビ放送の5局の幹部。社会学部の黒田勇教授の司会のもと、関西圏における放送メディアの果たすべき役割や意義に焦点をあて、メディアの中で依然大きな影響力をもつテレビの未来について、闊達な議論が交わされた。その後の学生・生徒による質疑応答では、災害時における情報発信の在り方や、制作現場で求められる能力、やりがいについてなど、多様な質問が次々と投げかけられ、盛会のうちに終了した。



テレビ5局幹部を招いたパネルディスカッションでは熱い議論が交わされた

◎ 関西大学協賛の「大阪マラソン2017」開催

関大生700人が大活躍



11月26日、今年で7回目となる「大阪マラソン2017」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が開催された。大会のスローガンは「みんなでかける虹」。沿道には130万人もの人々が詰め掛け、公募により選出された約3万2,000人のランナーに熱いエールを送った。

関西大学は第1回大会からオフィシャルスポンサーとして、地元「大阪」を盛り上げるため、毎年さまざまな形で大会運営に携わってきた。今大会も、ランナー40人をはじめ、給水、チャリティ募金、語学対応、清掃など、多くの学生と教職員がボランティアとして参加。沿道では応援団、JAZZ研究会、ダブルダッチ会Mix Package、お祭りダンスサークル「漢舞」、フラダンスサークル「coco girl」が、「ランナー盛上げ隊！」として熱く楽しい応援パフォーマンスを繰り広げ、大会に彩りを添えた。

語学対応ボランティア

清掃ボランティア



給水ボランティア

また、24日から26日には「大阪マラソンEXPO 2017」が開催され、24日と25日には、研究力と地域連携をテーマにブースを出展。株式会社をくだ屋技研とシステム理工学部の倉田純一准教授がタッグを組み開発した、トレーニング用車いす「Joyfum(ジョイフム)」の展示・試乗会を行い、研究成果を披露した。また、大阪市商店会総連盟とともに行うランナー給食エイド「まいどエイド」の全20種類以上に及ぶ食品サンプルを展示。社会学部の劉雪雁准教授が率いる学生広報チーム「Lucky」によるPR活動と当日の給食活動にも注目が集まった。



トレーニング用車いす「Joyfum」



まいどエイド

◎ フィギュアスケート・グランプリシリーズ

宮原知子さんが金メダル、本田真凜さんも躍動



宮原 知子さん



本田 真凜さん

11月24日～27日、フィギュアスケートのグランプリシリーズ最終第6戦・アメリカ大会がレークプラシッドにて開催され、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文2)がショートプログラムに続きフリーも1位の高得点を出し、トータル214.03点で見事金メダルを獲得した。左股関節の疲労骨折による休養を乗り越え、復帰2戦目での優勝。宮原さんは「まさか優勝できるとは。つらい時期を乗り越えてよかった」としみじみ語った。

一方、今季からシニアに参戦した本田真凜さん(関西大

学高等部1年生)は、10月27日～29日に開催された第2戦・カナダ杯に出場。ショートプログラムは10位と出遅れたが、フリーは序盤で2連続3回転ジャンプを決めるなど、勢いに乗って3位となり、総合5位へと巻き返した。続く11月3日～5日に開催された第3戦・中国杯でも同じく5位に入賞した。

今後は2018年の平昌冬季オリンピック代表入りを懸けた全日本フィギュアスケート選手権大会での2人の活躍に熱い期待が寄せられる。

体育会野球部が関西学生野球連盟秋季リーグ戦で優勝！



山本 隆広さん 阪本 大樹さん

9月2日～10月26日に開催された関西学生野球連盟秋季リーグ戦において、体育会野球部が2季ぶり36回目の優勝を決めた。

10月1日の対近畿大学2回戦では、山本隆広さん(人3)が同連盟13年ぶりとなる史上2人目の完全試合を達成。続く11日の対立命館大学3回戦では、阪本大樹さん(経4)が完封勝利し、1982年の新リーグ発足後の新記録となる53イニング連続無失点の快挙を成し遂げた。阪本さんはその後も連続無失点記録を62イニングに更新する活躍を

みせ、最優秀選手、最優秀投手、ベストナインのタイトルを獲得。阪本さんは山本さんとともに特別表彰も受賞した。

また、この後、野球部は10月28日から大阪府南港中央野球場にて開催された第48回明治神宮野球大会関西地区代表決定戦(第15回大阪市長杯争奪関西地区大学野球選手権大会)に挑み、11月1日の対大阪市立大学を2-0で勝利。11月10日に開幕した第48回明治神宮野球大会へ関西代表として出場したが、初戦で創価大学に1-2で惜しくも敗れた。

(写真提供：関大スポーツ編集局)

第37回「地方の時代」映像祭2017を開催



関西大学、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本ケーブルテレビ連盟、吹田市が主催する「第37回『地方の時代』映像祭2017～地域だから見えるもの、地方だから伝えられること～」が、11月11日～17日、千里山キャンパスで開催された。初日には贈賞式が行われ、信越放送の『SBCスペシャル かあちゃんのごはん』がグランプリを受賞。本学からは「市民・学生・自治体部門」で、社会学部里見繁教授ゼミの『戦争が終わって僕らは生まれた』が奨励賞に選ばれ、本学の作品は6年連続での受賞となった。